

2020 年度事業報告（中高）

<p>1. 基本方針</p> <p>聖書に基づくキリスト教精神の原点に立ち、常にこれを意識しながら教育活動にあたる。生徒の評価を従来の点数や偏差値を重視するのみでなく、すべての生徒の自己肯定感・自己効力感を高めることにつながるものにし、安心できる学校生活の環境をつくる。生徒が、平和をつくること、隣り人につながることを生涯を通して求めるものとなることを教育目標に設定する。</p> <p>「学ぶ」……主体的に楽しく学ぶ。「認める」……他者を認め、自分を認める。「つながる」……他者や社会とつながる。以上の3つのキーワードを設定し、それぞれ「主体性の伸長」「人間理解の深化」「グローバルマインドの育成」をカリキュラムポリシーとする。この新しい教育課程の構築をより具体的なものとし、その実践を成果につなげるように取り組む。</p>				
<p>2. 具体的アクション</p>				
第2次中期計画 (行動計画)	2020 年度事業計画	目標達成のための手段等	具体的な目標（数値目標）	執行状況 及び課題と対応
<p>(1) 教育理念の実践と内部質保証の実質化</p> <p>ア キリスト教主義教育</p> <p>a. 礼拝を守る</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日々の礼拝を丁寧に守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ホール礼拝、放送礼拝とも、生徒に、静粛・黙想・傾聴の姿勢を守らせる。 キリスト教行事の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> キリスト教強調週間特別プログラムの持ち方を検討し、より良いものに改善する。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍のため、6月からの学校再開後の礼拝は、各教室での放送礼拝・オンライン礼拝となった。朝の礼拝を持って一日を始めることは守られた。 2学期から、ホールには一学年のみは集まること、そして各教室での讃美も始めた。 2期末の中学讃美歌コンクールは、学年毎で実施。高校のクリスマス礼拝は教室で放送礼拝として実施。キリスト教強調週間は、2学年ごとの3ターンのスケジュールで実施。 ICT機器を利用し、休校中もオンライン礼拝を持った。
<p>イ 新しい教育課程の構築</p> <p>a. 課題研究カリキュラムの実践</p> <p>b. 育成すべき資質・能力の設定</p> <p>c. 一人一台 PC の導入・活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「総合的な探究の時間」の充実 EP 講座の拡充 教科横断的な取り組みの推進 	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究教育検討委員会の指針による実践 課題研究を通して育成できる学力の評価の構築 EP 講座に様々な分野で活躍する社会人を招くものを開講。 図書館の改装など、課題研究に取り組む環境を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業および授業外のすべての活動において、生徒の主体性を大切にす。 従来の所属する集団の中での学力評価（偏差値など）でない、生徒一人ひとりの学ぶ力（生きる力）を評価できないかを模索する。 一人1台 PC の活用を通して育成できる学力の評価などは、上記のことを数値化できるものとする。そのため、一定の集団・時間・対象などの従来の枠を超えて、生徒を見ること、生徒の声を聴くことから始める。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究の取り組みは、中学の理科社会が中心となり推進。 4月から5月末までの休校中は、ICT機器を利用し、毎朝、担任による健康チェック、教科からの課題配信・オンライン授業配信により、生徒を一人にさせない状況をつくった。 中1高1は PC を一人1台購入したので、家庭での ICT 環境は整っていたが、他の学年は難しい家庭もあり、100台の PC を貸しだした。学校再開後のアンケートで

d. グローバル教育の実践	・PSの学びの充実	<ul style="list-style-type: none"> ・高校修学旅行の分散派遣の可能性を探る。 ・外部教育機関との連携を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人1台PCの体制は、2020年度中1・高1が持ち、2021年度は中1から高2まで完成し、2022年度は全員の生徒が持つ予定。 ・校務分掌の枠を超えたグループでの話し合いなど、全教員による取り組みにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・は、すべての学年で8割以上の生徒がICTを利用した学習に満足していた。 ・中2・3の保護者からPCの所有の切望があり、2学期末までにPCを持つことができた。 ・コロナ禍で外部とのつながりが持てず、多くのグローバル教育のプログラムが実施できなかった。一方、オンラインでの取り組みが急増している。
ウ 生徒支援の充実 a. 集団に適応できない生徒の支援 b. 基本的な生活習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談体制作りをする。 ・SNS使用に伴う危険性を理解させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談会議による検討 ・情報共有のケース会議の在り方の充実 ・教師側の統一した指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習ルームの在り方の見直しをする。 ・欠席多数による転出生徒の減少。 ・生徒保護者アンケートの「規則順守」評価数値の上昇。 	<ul style="list-style-type: none"> ・休校中の勉強についていけない生徒は中学生ほど多い。また、行事も制限され、自分の安心できる場を持たせることが課題。 ・生徒の安心度を測るQ-UアンケートをWEBで実施。データの活用のため、学年ごとに研究会をもち、上記に対応する。 ・保護者アンケート「規則遵守」評価値は0.5から1.0(2/3以上が肯定的である)に上昇。
エ 広報・入試対策 a. 私学受験者の確保 b. 入試問題の適正化を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・有効な私学受験者確保の動きを検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンスクールの充実。ただし、教職員の働き方は、十分に考慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・受験者の増加。 ・公立中高一貫校との差別化。 ・受験生の日頃の活動を評価するなど、本校独自の入試を模索する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンスクール、保護者対象説明会など、オンラインを利用。年間で1700名を超える参加あり。 ・志願者は717名。昨年度715名。入学者204名。私学への進学志向がより厳しい状況であり、迅速な対応が必要。 ・コロナ対応の特別入試を準備したが該当者はなかった。
オ 進路実績を伸ばす a. 難関大学の実績を伸ばす b. 大学共通テストへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学習習慣の定着 ・新しい教育課程に対応した進路体制をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任、教科担当が生徒を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・東大京大4名以上。国公立医歯薬8名以上。 ・保護者の進路に関する学校への要求が、多岐に渡っている。それへの共通した対応は、学力の確保しかない。一人ひとりをし 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に高3は、休校期間中、オンラインによる授業の配信を中心に、学習の進度を落とすことなく進めた。共通テスト対策は、十分とはいえない点があった。 ・国公立大学入試合格者数は、98名（うち過年度生11）。（京大1,

<p>c. 推薦入試等への対応</p>			<p>つかりと支援する進路体制をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キリスト教主義の大学との推薦入試における協定を図る。 	<p>大阪 2, 神戸 3, 九州 4, 広大 26)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私立大学推薦入試結果は, 指定校協定校推薦 42 名 (広島女学院 2, 関西学院 14, 同志社 9), 公募専願 4 名 (広島女学院 1) ・協定校入学 (関西学院 17, 同志社 14) ・地元広島私大入学者 31 名。(広島女学院 7, 修道 6, 安田 7, 日赤広島看護 6)
---------------------	--	--	--	--